The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	教育現場での実践と今後の課題
Author(s)	児玉, 七海
Citation	日本語講座年報. 2024, 2022-2023, p. 41-42
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95470
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

教育現場での実践と今後の課題

児玉 七海

1. はじめに

筆者は2023年4月から、大阪市平野区にある大阪みなみ日本語学校で週に１度非常勤講師として勤務している。まだ短い期間ではあるが、日本語教育現場で行っている実践とそこから得たこと、感じたことを振り返り、今後の課題や展望を述べる。

2. 担当クラスの概要

学校には主に大学（大学院）・専門学校への進学を目的とした学生が通っている。2年コース、1年9ヶ月コース、1年半コースがあり、１年生が３クラス、２年生が７クラスである。１クラスの人数は20人ほどである。筆者が2023年度を通して担当しているのは１年生のクラスで、『みんなの日本語初級Ⅰ』の１課から学習している。4月はひらがな、カタカナの復習から行っていた。5月までは3日で１課、6月以降は2日で１課のペースで進めた。

3. 授業への取り組み

筆者はボランティアで１対１で日本語を教えたり、留学先の日本語教育機関で作文の添削をしたりしたことはあるが、教員としての教授経験は全くなかった。しかし、専任の先生方の助けをいただき、課題は多くありつつもなんとか1回1回の授業ができている。初めのうちはカリキュラムを消化することで精一杯という部分が大きかったが、少し慣れてきてからは工夫するポイントもわかってきたように思う。授業をする中で意識していること、課題に思っていること等をまとめる。

なお各教室にはプロジェクターが設置してあり、授業、とりわけ文型導入はパワーポイントを用いたスライドを使用している。『みんなの日本語』を用いた初級の授業では学校で用意されているものがあるため、それを土台にし、教師が各自で工夫を加えて使うことになる。

3.1 文型導入

初級段階での文型導入は、『みんなの日本語』を用いた。新出の文型を用いた例文を３文提示して使い方を理解してもらった後、活用や助詞といった形を改めて確認するという流れで行う。１、２文目は教師が例文を完成させるが、３文目は学生がその文型を使って文を完成させられるように工夫する。そうすることでその文型の使い方を少しずつわかるようにしていく。

筆者が例文を提示する際に意識していることは、実際に使いたいと思える文であるか、授業の中だけの文になっていないかどうかである。例えば「これはペンです。」のような例文を提示しても、形は正しく作れるようになるかもしれないが、それだけ覚えても実際に言語活動が行えるようになるとは思えない。提示された例文を理解して、「こんなときはこう言うんだ」「自分でもこの言い方をしてみよう」と少しでも学生に思ってもらい、定着につなげたいと考えているが、これからも試行錯誤が必要だと感じている。

課題点としては、研修で学んだ、可能な限り教室全体を巻き込んで学生に文を産出させる、自分のことばにしてもらう授業をいかにするかということである。学生が積極的に発話してくれるためのコツといった細かい部分もアドバイスをいただいたが、筆者にとってはまだ今後の課題である。

3.2 練習

導入と同様、『みんなの日本語』を用いて行う。ここでの練習は、口慣らしのための口頭練習である。動詞の活用の変換といった短いフレーズでの練習のあとに教科書にあるドリル形式の練習問題（練習B）を用いた練習をすることが多い。

練習Bについては、定着に時間がかかる学生が比較的多いクラスであることを考慮して行っている。具体的にはいきなり一人ひとりに答えてもらうことはせず、2回ほど全体で答えとなる文をリピートした後に、何人かの学生を指名して改めて文を言ってもらっている。そうすることで口慣らしをする機会が増え、答えが全くわからないという不安が少し解消されると考えられる。

一方でこのような方法には課題点もあると考え

る。まず、定着の早い学生にとっては少し冗長に感じてしまわないかという点である。次に、リピートと指名だけでは、授業内容を理解しているかどうかに関わらず飽きてしまうという点である。これらの点を解消しようと、定着の早い学生には練習Bを一通り行った後に筆者が追加で作成した問題に答えてもらったり、テンポよく行うようにしたりしている。しかし集中できていない学生も多く、単調になっていると感じる。そのため、以前は会話形式の問題であってもクラス全体で行っていたが、今はペアワークを取り入れるといった工夫をしている。今後も自分なりに試行錯誤していきたい。

3.3 会話練習

各課の終わりに行う。ほとんどの場合『みんなの日本語』の本文会話をもとにして作成されたモデル会話を使う。このモデル会話は学校で用意されており、それをもとに適宜アレンジしている。

筆者は、大学院生としては会話分析の手法で実際の音声データをもとに会話について研究をしている。そのため、会話を扱う際には研究の中で知り得たことを意識することもある。

工夫している点としては、モデル会話に少しでもあいづちが入るようにすることである。研究の過程で、先行研究や実際のデータを見て、何か伝えたいことがあってもそれを一気に言うのではなく、あいづちを交えながらやりとりを重ねていくのが日本語会話の特徴だと考えている。あくまで練習なので自然会話のようにはできないが、なるべく一人で一気に話しすぎるようなモデル会話にならないようにしている。

しかし自然にすれば良いということでもない。なるべく自然に思える日本語にしたいが、初級段階で未習の文型、表現が多いため、既習の表現の中でいかに自然にするかを考える必要があると考える。一度未習の段階で「～んです」という表現を入れてしまったことがある。学生から「～んです」はなんですか、と聞かれ、学生を混乱させてしまったと反省した。会話の授業を担当する際には、自然さとわかりやすさのどちらも考慮して行いたいと思う。

4. 今後の課題とこれからの展望

3節でも課題点を述べたが、授業全体を通して挙げられる課題は山積している。時間配分といった基本的なことから、内容についてももちろんまだできていないことの方が多い。内容については、文型導入・練習、４技能の指導、漢字指導、発音指導などそれぞれについて知識不足であり、勉強や経験を積んでいく必要がある。また学生に少しでも面白いと思ってもらえるようにメリハリをつけた授業をすること、受けた意味があったと思える授業にするといったこともこの先ずっと考えていかなければならないと感じている。当たり前のことではあるが、これらのことは日本語教育を学んでいても、日本語教師として教える経験をしなければわからなかった。日本語教育とは異なるが、自分がこれまで受けてきた教育と結びつけて、「あの時先生はこんなところに苦労していたのかもしれない」といった感想を抱くようになり、教えることの大変さと面白さを日々感じている。

今後も日本語教師として経験を積んでいきたいと考えているが、どこでどのように教えていくかはまだ明確ではない。現時点では、まずは目の前にあるやるべきことに取り組んでいき、これからさまざまなことに挑戦していきたいと思っている。

最後になりましたが、学校の名前を出すことに快諾してくださった大阪みなみ日本語学校の先生に感謝申し上げたいと思います。

【参考文献】

大阪みなみ日本語学校ホームページ
https://osaka-minami.com/
（最終閲覧日　2024年1月10日）